

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 31 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26360040

研究課題名(和文)近代ドイツのナショナリズムと女性の政治化 - 植民地問題を中心として

研究課題名(英文)Nationalism in modern Germany and Promotion of political Activities of Women in Connection with colonial Subject

研究代表者

姫岡 とし子(Himeoka, Toshiko)

奈良女子大学・アジア・ジェンダー文化学研究センター・協力研究員

研究者番号：80206581

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ドイツ人女性の植民地への移住事業を担った「ドイツ植民地女性連盟」の活動を取り上げ、「女性の領域」でのドイツの優位を説いて、われわれ/他者の構築に積極的に関与したことを述べた。他方で男性上部団体の批判に対抗しながら自律的に活動し、女性の発言権の強化に貢献した。第一次世界大戦末期には、右派ナショナリストの女性たちは、民主化の進展を恐れて女性参政権導入に反対した。階級、民族、ジェンダーは複雑に絡み合っていて、民族や階級がジェンダー問題を進展させることもあれば、後退させることもあった。しかし、ジェンダー間の差異を基盤とするナショナリズムも、確実に女性の政治化に寄与したことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The "German-Colonial Women's League" playing an important role for the migration of German women to the colonies argued German supremacy especially in the women's sphere and constructed actively the difference of German and other peoples. On the other hand the League acted autonomously in competition with the men's colonial League and contributed to the improvement of the status of women. At the end of the first world war facing waves of democratization the right wing of nationalist women had to put class issues before gender issues and opposed to the introduction of women's vote. As a whole nationalism basing on the gender difference contributed to promoting political consciousness and activity of women in various interactions of class, national and gender struggles.

研究分野：ジェンダー

キーワード：近代ドイツ ネイション ナショナリズム フェミニズム 植民地 女性参政権 ドイツ植民地女性連盟 第一次世界大戦

1. 研究開始当初の背景

1990年以降に活発化したネイション(国民)・ナショナリズム研究の波は、歴史研究、ジェンダー研究にも及び、私の専門とするドイツ・ジェンダー史の分野でも、構築論的、文化史的、ポスト・コロニアルな観点からの研究が、アメリカやドイツの研究者によって行われるようになった。そして現在では、従来のネイションの枠組みからの女性の排除ではなく、ネイションの構築には女性は不可欠という包摂の見解が主流になり、その上で、ネイションのなかで男女がそれぞれどのような役割を果たし、どのようなアイデンティティを抱いたのかが問われるようになった。

日本では欧米のナショナリズムとジェンダーに関する本格的な研究がほとんどないなかで、私はドイツのナショナリズムとジェンダーに関する研究を2011年に科研の支援を得て開始した。採用した枠組みは、ナショナリズムを従来の政治史研究のように解放的局面と攻撃的局面という二段階に分けるのではなく、排除と包摂という観点からとらえる見方である。ナショナリズムは他者の劣視と排除という攻撃性を一貫して内包するとともに、包摂される人びとには参加と平等の道を開いていく。女性も男性も、ネイションのなかに包摂はされているが、それぞれに求められた役割はどのようなもので、それが性差観や男女間のヒエラルヒーとどう関連していたのか。前回の科研では、急進ナショナリストのジェンダー観を考察し、彼らが本質的だとみなしていた性差間および民族・人種観をベースにして、ドイツ・ネイションの進むべき道が決定されたことを明らかにした。ナショナリストは、異民族は排除するが、

女性に関しては、ネイションには包摂しながら、女性がネイションでの「男性の領域」に入ることは拒否し、進出の試みには徹底的に対抗した。ナショナルな運動を推進する女性たちは「女性の領域」で、民族・人種的な他者を排除しながら女性独自の活動を展開したが、その過程で「ジェンダー間の境界を」を越え、男性ナショナリストと対立することもあった。女性にとって「女性の領域」にとどまることの魅力と、運動することによるネイションへの参加と女性たちの政治化について、より詳しく考察したいと考えた。

2. 研究の目的

ドイツの右派ナショナリストは、男性も女性も他者との差異をベースにわれわれの一体化を目指していたが、その実現過程の一つである植民地の獲得およびその統治過程に注目する。その過程で、われわれ=民族としてのドイツ人/他者=植民地化された民族の差異化はどのように行われ、その結果、どう他者に対するドイツの優位が強調され、それを貫徹していったのか。そして、このプロセスに女性たちは、どう参加していったのか。そして、その活動のなかで女性のネイションへの参加と政治化は、どう推進されたのか。そして性差を自らの政策立案のベースの一つに据えている男性ナショナリストは、この女性の活動をどう捉え、女性の政治化にどう対抗していったのだろうか。

これらの点を具体的に明らかにするために、「ドイツ植民地協会女性連盟」の活動に注目する。ドイツの植民地では、1905年以降、ドイツ国籍をもつ混血児の誕生がドイツの価値を低下させるという理由で、当初可能だった現地女性との結婚が総督府レベルで禁止された。これによりドイツ人女性を植

民地に移住させる必要があったが、男性だけではこの活動がスムーズに進まなかったため、「ドイツ植民地協会女性連盟」が結成されて、この活動を担うことになった。植民地は、教育、衛生、健康、家政など多くの分野で女性の活動領域を提供し、女性たちはドイツの血と文化を守るために活発に活動した。この経緯をたどることによって、女性たちによる、われわれ/他者の構築過程が解明できるはずである。

また「ドイツ植民地協会女性連盟」をはじめ、ナショナルな女性組織の一部は、女性の地位向上をめざす「ドイツ女性団体連合」に加盟し、自律的に活動するようになった。この行為は、「女性の領域」のなかだけではなく、男性の指導下での女性の活動を望んでいた男性たちから強く批判された。こうした男女の対立を見極めることによって、男性との妥協や譲歩の過程を含めて、女性がどう自律化や政治化を推進したのか、そこにナショナリズムはどう関連しているのかを具体的に解明する。1910年代以降、とりわけ第一次世界大戦末期には、ナショナリスト勢力の共通の敵である、社会民主党勢力が伸長し、ナショナリストの女性たちは、ジェンダーの問題だけではなく、階級間の問題への対処もせまられることになる。政治状況が変化するなかでのナショナリストの女性たちの具体的な活動を見ることによって、ジェンダー、民族、階級の絡み合いについて、考察したい。

3. 研究の方法

まず植民地とジェンダーならびに戦争とジェンダーに関する研究動向を把握した。その後、ネイション、ナショナリズム、植民地、ドイツ植民地協会連盟、ドイツ植民地協会女性連盟、ナショナリスト系女性団体などに関する史料を、日本の図書館、ドイツ国家図書館、いくつかの文書館で収集した。収集した史料を整理・分類し、これに基づいて論文の構想を考えた。今回は、ドイツと日本の事例

を比較するため、日本の参政権や反参政権、ポストコロニアルの観点からとらえた日本、戦争と性暴力などについても研究した。

4. 研究成果

「ドイツ植民地協会女性連盟」は、ドイツから植民地への女性の移民の推進に関して上部団体の「ドイツ植民地協会連盟」よりはるかに大きな成果を達成した。家庭という「女性の領域」は、ドイツの血と文化を守るかなめだと考えた彼女たちは、移民女性の事前教育などで、不潔で繊細な仕事ができない現地人とドイツ人との違いを強調し、ドイツの優位を構築するとともに、植民地においてもドイツ的家政を実践するよう、訴えた。植民地に移住したドイツ女性の生活報告からも、こうした意識が浸透していたことがわかり、「女性連盟」だけではなく、移住女性たちも、われわれ/他者の構築に積極的に参与していた。異人種婚に関しても、オリエンタリズムに特徴的な現地女性の性的誘惑が語られ、彼女たちと結婚した場合、家庭生活の水準もドイツ的なものとはくらべものにならないくらい低下し、現地人の肌の色をもじって、ドイツ人のコーヒー化が嘆かれた。ドイツの帝国議会でも異人種婚をめぐる激しい議論が行われ、本国レベルでこれを禁止するには至らなかった。

男性の団体である「ドイツ植民地協会」の指導下での「ドイツ植民地協会女性連盟」の活動を望んでいた男性たちは、活動の成果があがるにつれて女性が自律性を強め、女性の地位向上をめざす「ドイツ女性団体連合」に加盟したことに憤りを抱き、女性たちと激しく対立したが、女性たちは自らの見解を貫いた。「女性連盟」の「連合」への加盟理由としては、女性の地位向上に理解を示す会長の就任に負うところが大きく、「植民地連盟」内部のことに限らず、女性の領域での女性の発言権を強めようとした。植民地以外のナシ

ヨナルな傾向を抱く人たちも、自分たちが何もしないとリベラル系が伸長すると判断し、過去に形成していた女性団体に加えて、特定の右派政党を支持しないし、そのために活動する組織を形成し、女性の政治化は確実に進んでいった。女性の政治化の推進には、社会民主党系やリベラル系とならんでナショナリズム系も確実に関与していたといえる。

第一次世界大戦が勃発すると、女性団体は「連合」を中心とするリベラル系、社会民主党系、カトリック女性団体が協力して「女性祖国奉仕団」を形成したが、愛国女性団体など、右派ナショナリストの女性団体は独自の活動を展開した。戦争末期になり、社会が民主化され、女性参政権導入が現実味を帯びてきたとき、右派の女性たちは、社会民主党およびリベラルの力を強める民主化には絶対反対し、女性参政権に賛成ないし保留の立場をとっていた女性たちは、明確に女性参政権に反対するようになった。女性参政権より民主化を阻止し、君主制を擁護することが重視されたのだ。ジェンダー関連の事項は、決してそれ独自に決定されていったわけではなく、ジェンダー、民族、階級の絡み合いのなかで進んでいった。

女性参政権と反女性参政権に関するナショナリストを含めた関係者の活動とその結果については、日本との比較の観点から論文を執筆するとともに、国際学会でも報告した。

他にも、独ソ戦下のドイツ兵の性的接触を扱ったミュールホイザー『戦場の性』（岩波書店、2015年12月）を監訳し、その関連で性暴力を中心とするドイツ兵の戦場の性と人種観、さらにその記録と記憶について日本との比較の観点から考察し、いくつかの学会や研究会で報告した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

1, 姫岡 とし子 「ドイツの歴史教育とホロコーストの記憶文化」『学術の動向』2016-5(2016年5月) pp.48-53. 査読なし

2, 姫岡 とし子 「日本とドイツの反フェミニズムとナショナリズム」『政策科学(立命館大学政策科学部紀要)』22号第3巻(2015年3月) pp.229-244. 査読なし

3, 姫岡 とし子 「教養教育とジェンダー史」『学術の動向』2014-5(2014年5月) pp.8-15. 査読なし

[学会発表](計 5件)

1, 姫岡 とし子 (比較)「ドイツにおける「記憶」と戦時性暴力」ジェンダー法学会公開シンポジウム(2016年12月4日、戦時性暴力と法 慰安婦問題と戦後補償)立命館大学

2, Himeoka, Toshiko, Struggle and Difficulties of Women's Vote from Comparative Perspective (Internationale Tagung, 50 Jahre Frauenwahlrecht, Basel-Stadt, June 17, 2016)

3, Himeoka, Toshiko, The Women's Suffrage Movement and Japanese Modernization in the East Asian Context(Workshop "Post-Colonial Feminisms: Perspectives from Egypt, India, and Japan", Zurich, June 16, 2016)

4, 姫岡 とし子 コメント・ドイツとの比較から「歴史教育の明日を探る」(2015年8月1日、日本学術会議公開シンポジウム)日本学術会議講堂

5, 姫岡 とし子 趣旨説明・司会、コメント「戦争における災害・環境とジェンダー」, 史

学会シンポジウム「近代における戦争と災害・環境」(2014年11月8日) 東京大学

〔図書〕(計 5件)

1, 姫岡 とし子「はじめに」「第一次世界大戦中ドイツでの戦時支援と女性の地位」公益財団法人史学会(編)『災害・環境から戦争を読む』山川出版社(2015年11月)pp.234 (pp.3-9, pp.181-208) .

2, 姫岡 とし子「優しい父親・戦う男性 - 近代初期ドイツのジェンダー・階層・ナショナリティ」落合恵美子・橘木俊詔(編)『変革の鍵としてのジェンダー 歴史・政策・運動』ミネルヴァ書房(2015年8月) pp.317(pp.41-59).

3, 姫岡 とし子「外国における日本女性史研究 ドイツ」女性史総合研究会編『日本女性史研究文献目録 1868 - 2002 CD-ROM版』東京大学出版会(2014年10月) pp.190(pp.185-190).

4 . Himeoka, Toshiko, The Gendering of Work and Workers in the Process of Modernisation of the Textil Industry, in: Germer/Mackie/Wehr(eds.)Gender Nation and State in Modern Japan, Routledge, 2014,7, pp.315(pp.119-140).

5 . 姫岡 とし子 三成美保・姫岡とし子・小浜正子(編)『歴史を読み替える - ジェンダーから見た世界史』大月書店(2014年5月) pp.314.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

姫岡とし子(Himeoka, Toshiko)

奈良女子大学・アジア・ジェンダー文化学
研究センター・協力研究員

研究者番号 : 80206581